

移転秘話 一幻の南千住移転計画一

東京女子医科大学足立医療センター副院長
脳神経外科診療部長・教授
糟谷英俊

2022年の新春に私たちの病院は足立区へ移転し、足立医療センターとなります。内潟安子病院長は移転に伴い「85周年記念誌―地域と歩んだ85年―」を上梓されました。そのなかで、岩本絹子理事長は、「平成22年(2010)に、荒川区内での移転を前提に移転候補地を探していましたが、確保に至りませんでした」と書かれています。理事長は、当初より、移転しか発展の道はないと判断されていたと聞いています。足立区への移転は、この時の活動がなければ実らなかったと思っています。1行半しか書かれていないこの時のことをもう少し書き残したいと思い筆を執りました。私には幸いに資料が残っています。大塚病院長や荒川区から、移転計画の経緯を時系列に書いて提出せよと何度も依頼を受けて書いていたためです。ここに、その資料を紐解きたいと思います。

私事ではありますが、私は2007年4月に東医療センターに赴任しました。大きな会議室がないため、職員食堂で部長会を行っていたのにまずは驚きました。慣れとは恐ろしいもので、誰も文句を言っていません。井上病院長の建てられた東病棟はあるものの、どんどんと新しくなっていく河田町の施設と比較すれば、同じ女子医大の施設とも思えません。何かの折にTWINSへ赴くと、収入のある医療施設が研究施設と比べ、時代感覚で50年くらいの格差があるように思えます。細切れの建物に散らばる医局、古く雨漏りのする病棟、東電や地主から借りている土地、はしご車が入らない災害拠点病院、とりわけひどいのが、病院内を通る高压電線。都内では多くの病院が移転をして発展していました。このままでは発展の余地はない、このような病院では働きたくない、なんとかしなくてはいけない、と思いました。

平成22年(2010年)

2010年新春、私は高校の同級生で友人である、小林由次郎(積和不動産株式会社コンサルティング営業部営業本部長、取締役、DMで女子医大に通院中)君らと新年会をした際、半ば冗談で、「東医療センターは移転しか発展の余地がない。荒川区以外には行けないし、どこか荒川区内にいい土地はないか?」と尋ねました。「JR貨物から南千住駅前の土地の有効利用の話がきている。荒川区と協議して有効活用しようとしてきたが、うまくいっていない。とりあえず、病院として活用できるか、出入りしている設計事務所(広建設計大津社長)に図面引かせてみるよ」と返答しました。これがそもそもの始まりです。

2月12日に私は積和不動産本社（新宿マインズタワー）を訪問しました。小林君から予定地図面の説明を受け、受け取りました。翌週、上野恵子先生（東医療センター放射線科部長）に事の経緯を説明し、図面を見せて相談したところ、すぐに大塚邦明病院長に放射線科部長室でこの件を話し図面を見せました。病院長はこの話を推進するよう指示されました。

南千住駅は、JRと日比谷線、つくばエクスプレスの3路線が入っています。千葉、埼玉からの患者さんを受け入れることが可能となります。江戸時代は小塚原という刑場で、近くの回向院では杉田玄白や前野良沢が腑分けに立ち会い、解体新書を翻訳したことで知られています。言わば、近代医学の発症の地ともいえます。ドヤ街として有名な山谷が近くにはありますが、最近では外国人旅行客に人気となり、しかも、近くには高級高層マンションが建ち、昔の面影は失せつつあります。荒川区長は、天皇陛下が那須に行かれるときは、ここから鉄道に乗られるのだ、と言っていました。それくらい安全ということのようです。

その後、病院長はすぐに平岩常務理事、永井統括病院長理事に移転計画を説明し、移転予定地の見学にも行ってもらいました。8月には一部の土地の所有者である荒川区役所訪問。西川太一郎荒川区長、小坂荒川区議会議員に面会しました。また、病院長は2回ほど執行運営委員会でプレゼンしました。しかし、10月の理事会で財務状況から、いったんは凍結とされてしまいました。

JR貨物からは、理事長印での文書を求められていました。病院長印の申し入れ書でことが運ばないかと、JR貨物の意向を再度聞きましたが、機関決定が必要と断られてしまいます。また、平岩常務理事と面会し、理事長印の申し入れ書を求めましたが、無理と断られて、この年の瀬を迎えました。

平成23年(2011)

八方ふさがりのように思われましたが、私たちは諦めませんでした。特にこの年3月11日の東北大震災は、災害拠点病院としての機能や、耐震性が新たな問題として移転を後押ししたように思いました。小林君は調査会社を入れて南千住の病院としての可能性を調査してくれました。7月に、この件にあまり協力的でなかった足立事務長から、瀧田新事務長に変わりました。JR貨物は、自前の土地に建物を建てて賃貸するのが基本姿勢としているため、ジェイアールエフ商事株式会社の栗原常務に面会しました。つまり、初期投資はいらなくなることはありません。この時にも、話を進めるためには機関決定である理事長印が必要と言われてしまいます。JR貨物は国の補助金を得て移転予定地の一部にトラックの駐車場を作る事業を進めてきましたが、これが決定し、予定地の面積が狭くなってしまいました。容積率を400%とすれば駐車場を地下に作って600床の病院は可能と、大津社長は計算してくれました。西川区長は面会時には極めて協力的です。「南千住への移転に向けて積極的に行動を起こしていきましょう」と言いま

す。荒川区の窓口は門倉整備部長となり、東医療センターの窓口は私となって、情報交換を重ねました。大塚病院長は、永井統括病院長理事の意向を受けて、北区の造幣局病院なども候補として検討を始めたとのことでした。JR 貨物からは再三事業を早く決定したいと申し入れがありました。来年の 1 月まで待つが、それ以降は女子医大のプライオリティーがなくなるとの説明を受けました。しかし、土地の一部を荒川区が保有しているため、荒川区の同意がないと進められないのでした。

平成 24 年 (2012)

JR 貨物の意向から、私たちはなんとかこの計画にゴーサインがでないかと焦りました。この年の 1 月 18 日、院長副院長会議の後に吉岡博光理事長が現れました。瀧田事務長が呼んだのでした。この移転計画を説明し、その後、上野先生と事務長が、南千住の移転予定地を案内しました。1 月 25 日、病院長と事務長が理事会の後の病院管理者会議で移転計画をプレゼンしました。その際、永井統括病院長理事と立元理事が、計画をするのに理事長印が必要な点、期限をつけられている点、不動産屋が入っている点、図面ができていない点、などがおかしいと指摘されました。4 月になって、大塚病院長、瀧田事務長、中沢・高木副院長、私が荒川区役所に荒川区長を訪問しました。門倉整備部長も同席しています。病院長はこれまでの経緯を説明し、2 年半かけて南千住移転について理事たちの了解を得るべく努力してきたが、財務面で難航している。荒川区長には補助金などを獲得できるようお願いしたいと言いました。区長の頭のなかでは、災害と移転が結びついたようで、「私も最大限努力する」と答えてくれました。

私は 2012 年にも副院長を拝命しました。その時の私の大学ニュースの原稿ですが、「私は 2 年間、東医療センターで副院長を務めました。当院は、いまだ DPC を導入できないなど、解決すべき難問が山積しております。これらを解決するためにも、災害拠点病院として機能するためにも、病院移転以外には発展はおろか存続も難しいと考えるに至っております。ほとんどの職員の思いであり現場の声です。院長以下移転に向けての方策を探っていきたいと考えます。・・・」原稿を送りますと、大学ニュース委員会から、ほんとうにこのまま掲載してよいか、との指摘を受け、下線部分を、「これらを解決し、災害拠点病院として機能するためには、今、大いなる決意が必要です。病院移転などの画期的な発想を創造していかない限り、発展はおろか存続も難しい状況に至っています。これは、ほとんどの職員の思いであり現場の声です。病院長以下、将来構想の実現に向け方策を探っていきたいと考えます。」と訂正されてしまいました。

荒川区が粘ってくれていたため、JR 貨物も動けなくなっていました。この年の後半は、補助金を得るための方策を荒川区、JR 貨物、積和不動産と一緒に模索しています。容積率を 400% とすると税金が高くなるとか、駐車場を地

下にすると建設費が上がるとか、WTOの問題であるとか、建物を自前で建てないと補助金が出ないのではないとか、ややこしい問題がいくつももち上がりました。JR貨物からは、理事会の決定が得られないことに不信感を持たれていました。私たちには、80年の歴史のある荒川区でしか移転はあり得ないということが頭にありました。また、南千住駅直結の利便性は捨てがたいと思っていました。しかし、理事会では、他の区への移転も含めて検討されているようでした。この年の暮れ、認可を受けていた684床のベッド数のうち、495床以上は東京都へ返納することとなっています。

平成 25 年 (2013)

3月に大塚先生は退任され、上野先生が病院長となりました。また、大学では理事長が吉岡俊正先生となりました。9月11日の部長会で上野病院長から発表がありました。南千住のこれまでの経緯を説明され、全く諦めたわけではないが、一旦交渉は打ち切るとのこと。2つの要因があり、JR貨物は、公共性の高い施設を希望しているが、容積率アップは、税金が上がるために、希望していないとのこと。もうひとつは、荒川区の区長で、女子医大のために大きなお金はだせないと言ったためとのことでした。こうして南千住にとうとう終止符が打たれました。

実はこの発表の前の月に、足立区選出の国会議員が理事長・病院長と面会していました。また、近藤やよい足立区長は病院長ともすでに会っていました。近藤やよい足立区長は若くはつらつとしていて、学校給食をおいしくして残飯率と減らしたことで有名でした。これまで、放送大学、東京藝術大学、東京未来大学、帝京科学大学、東京電機大学などの大学を次々と足立区内に誘致してきた実績もありました。そして、足立区は大学病院を区内に持つことが悲願でした。私たちが移転を模索しているのを聞きつけて、いろいろな人が動いていたようです。

「できないのは、能力ではなく、執念の欠如である」という土光敏夫の言葉があります。私たちには、現場にいなければ持ちようのない執念のみはあったように思います。また、女子医大の望むような条件をもってきた足立区にも執念があったのでしょうか。会社の利益のためとはいえ、小林君と大津社長には感謝したいと思います。

以上、「平成22年(2010)に、荒川区内での移転を前提に移転候補地を探していましたが、確保に至りませんでした」の顛末でした。